



「日本列島地図一筆描き」に挑戦！うまく描けるかな？

CONTENTS

1. 2025夏休み各種イベントを実施	2
2. UN-GGIM第15回会合への参加報告	4
3. 令和7年度第1回国土地理院研究評価委員会を開催	5
4. 第248回地震予知連絡会の開催概要	6
5. 「自然災害伝承碑」ウェブ地図「地理院地図」での公開数	7
6. 8月の報道発表・10月の主な行事予定	7

2025夏休み各種イベントを実施

「地図と測量の科学館」(茨城県つくば市)では、こどもから大人まで幅広い年齢層の方々に向け、私たちの生活にかかせない地図や測量の役割を楽しみながら学び、体験できるイベントを実施しました。

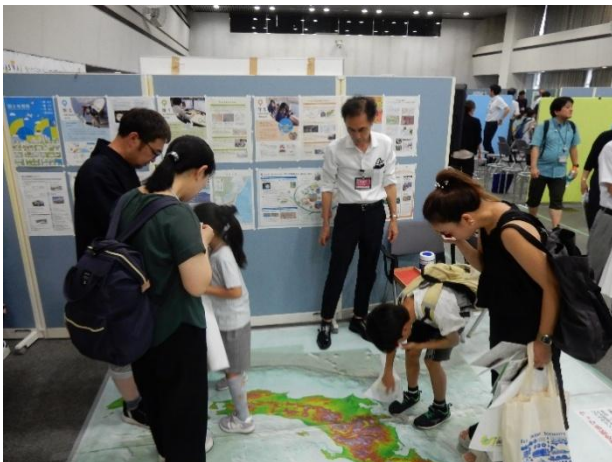
○こども霞が関見学デー

8月6日と7日の2日間、国土交通本省において、「冒険！発見！国土交通省」をテーマに「こども霞が関見学デー2025」が開催されました。

国土地理院は「まるごとニッポン！～地図で学ぼう、クイズとパズル！！～」と題し、「1/75万日本列島余色立体地図」「3D分県パズル」「立体地図模型」「地図・地理クイズ」など、こども達が楽しみながら体験できるプログラムを出展しました。

余色立体地図の迫力に驚きの声が上がリ、分県パズルやクイズに何度も挑戦したり、立体地図模型の作り方を熱心に聞くこども達の姿がありました。

イベントを通して、地図により興味を持ってもらえた様子で、両日とも盛況のうちに終了しました。



余色立体地図に驚き



人気の分県パズルとクイズ

○職場体験学習

7月29日、つくば市立大穂中学校から5名の生徒が職場体験学習に参加しました。

「地理院地図に触れてみよう」では、昔の空中写真の見方や、地図上での距離や面積の測り方を興味深く体験していました。「分度器で高さを測ろう」では、自分で作成した分度器を使い、簡易的な高さ測定に熱心に取り組んでいました。

「地理院地図の操作を家のパソコンでも試したい」、「分度器を使って色々な建物の高さを測ってみたい」などの感想が寄せられました。



パソコンで地理院地図を体験

○「地図と測量の科学館」夏休みイベント

地図と測量の科学館における今年の夏休みイベントは、7月30日、31日、8月20日、21日に「空中写真立体視体験」「地図かるた」「日本列島地図一筆描き」「歩測チャレンジ」を実施し、7月23日、24日、7月29日～31日、8月19日～21日に「地図・測量に関する相談コーナー」を開設しました。

「空中写真立体視体験」は、スクリーンに投影された重なり合う2枚の空中写真を偏光グラスを通して見て“立体視”を体験するコーナーです。つくば周辺の空中写真がスクリーンに映し出されると、偏光グラスをかけた参加者は興味津々に見入っていました。



立体視体験：飛び出して見えるかな

「地図かるた」は、問題用紙(初級・中級・上級の3種類)に書かれた問題の答えを机の上に広げられた“地図かるた”の中から探し出して答えるものです。初級は小学3年生程度、中級は小学6年生程度、上級は中学生以上を対象に想定していましたが、小学2年生くらいの子たちでも次は中級、その次は上級と次々に挑戦していく様子も見られました。



地図かるた：答えはなんだろう

「日本列島地図一筆描き」は、お手本の日本地図を見ながら、北海道、本州、四国、九州の4島をそれぞれ“一筆”で描いてもらい、コンピューターで採点するというものです。

親子で点数を競い合ったり、小さい子どもが思いがけない高得点に喜んだり、点数に納得できずに何度も挑戦する小学生がいたりなど、挑戦された皆様には楽しんでいただけたようでした。高得点となった優秀作品はホワイトボードに貼り出され、多くの来場者とその出来映えに驚きの声などを上げていました。



日本列島地図一筆描き：一筆描き挑戦中！

「歩測チャレンジ」は、伊能忠敬が第一次測量においては距離を“歩測”で測ったといわれていることにちなみ、テストコースで自分の歩幅を計測し、それを踏まえたうえで、2点間の距離を自分の足だけで測ってみようというものです。家族で参加された方の中には、「お母さんはぴったり」、「お父さんは全然違うよ」などと盛り上がっている様子も見られました。



歩測チャレンジ：私の歩幅はいくつかな

「地図・測量に関する相談コーナー」では、北方領土の地図作成やジオイドの測定手法など、幅広い相談がありました。

「地図と測量の科学館」では、今後も様々なイベントを企画し、随時、ホームページやXなどでお知らせします。ぜひご来館ください。

「地図と測量の科学館」ページ

<https://www.gsi.go.jp/MUSEUM/>

(総務部)

UN-GGIM第15回会合への参加報告

「地球規模の地理空間情報管理に関する国連専門家委員会(UN-GGIM)」は、国連経済社会理事会(ECOSOC)の下に設置され、地理空間情報の整備と活用を通じて地球規模の政策課題を解決するため、加盟国の中で広く議論、調整等を行っています。国土地理院は、2025年8月に国連本部(米・ニューヨーク)で開催されたUN-GGIM第15回会合に我が国代表として参加しました。

会合は、8月6日から8日に対面形式で開催されました。77の国・地域及び国際機関等から約350名の専門家が参加し、国土地理院からは、飯田洋基本図情報部長、宮原伐折羅測地観測センター長、宮下妙香企画部国際課長が出席しました。



議場の様子

会合では、SDGsや気候変動など、地球規模の課題解決への地理空間情報の貢献について、加盟国から活発な発言があり、日本からも次のような発言を行いました。

「地球規模の地理空間情報管理体制の強化」の議題では、UN-GGIM事務局体制の強化を歓迎し、事務局が示している献身的な働きに敬意を表する一方で、予算増額を提案する際には透明性の確保の観点から詳細な説明を求める発言を行いました。

「地球規模の地理空間情報の議題に対する地域委員会の貢献」の議題では、UN-GGIMの地域委員会の一つである国連地球規模の地理空間情報管理に関するアジア太平洋地域委員会(UN-GGIM-AP)の副会長国として、加盟国のさらなる貢献を呼びかけました。

「地球規模の測地基準座標系」の議題では、UN-GGIM-APの測地基準座標系作業部会(WG1)の部会長として、国際的な測地サプライチェーンの更なる構築を支援していく旨の発言を行いました。その他にも、国連本部外に設置された地理空間情報関係のセンターのうち、地球規模の測地連携

拠点(UN-GGCE)、地理空間知識・イノベーションセンター(UN-GGKIC)に関わる関係者の取組に敬意を表するとともに、今後も貢献を継続していく旨の発言を行いました。



各議題への日本からの介入

また、8月4日、5日には、会合に先立ち、UN-GGIMの下に設置された作業部会等の組織が共同で主催した各種のサイドイベントや、国連総会で採択された「持続可能な地球規模の測地基準座標系」(GGRF)から10周年を迎えるフォーラムが開催されました。これらに参加したほか、会議の合間には、各国代表団と対話を行うなど、今後の活動に必要な情報収集等を行いました。

本会合の会議文書等の情報は国連Webページで公開されており、関連ドキュメントや会議の録画を参照することが可能です。

<https://ggim.un.org/meetings/GGIM-committee/15th-session/>

国土地理院は、引き続きUN-GGIMやUN-GGCE等に参加し、積極的に国際活動を推進していきます。

(企画部・基本図情報部・測地観測センター)

令和7年度第1回国土地理院研究評価委員会を開催

令和7年度第1回国土地理院研究評価委員会(委員長:島津 弘^{しまづ ひろし} 立正大学教授)を、7月16日に関東地方測量部(東京都千代田区)において開催しました。

国土地理院研究評価委員会は、国土地理院の研究開発に直接関わる専門分野の外部専門家及びそれ以外の外部有識者により構成され、個別の研究課題について詳細な評価を実施しています。評価は、事前評価、中間評価、終了時評価に分かれており、事前評価は、新たに実施する課題に係る概算要求前に実施し、課題設定の妥当性等の評価を行っています。中間評価は、研究開発期間の途中で実施し、目標の達成度等の評価を行っています。終了時評価は、研究開発期間の最終年度に実施し、目標の達成度等の評価を行っています。

今回の委員会では、令和8年度に開始する特別研究課題「衛星データを用いた災害時の迅速な地形変化等把握に関する研究」の事前評価が行われました。本研究は、災害時における被災状況の把握において求められる迅速性や判読性の向上に向け、近年、国産民間小型SAR衛星の機数が増加していることや、2030年度に官民連携による小型光学衛星観測システムの高度化によるサービス開始が見込まれていることを踏まえ、先行的に小型衛星データの活用を想定した研究開発を行うものです。具体的には小型SAR衛星による災害発生時の迅速な地形変化の抽出や、様々な活動の意志決定に有効となる小型光学衛星画像と異なる種類の画像との自動変化抽出手法の開発を行うものです。

本研究に対し、委員からは主に以下のご意見をいただきました。

- ・技術の変化が非常に速いので、フレキシブルに対応して研究を進めていただきたい。
- ・地震災害だけでなく、浸水被害や火山災害、また広域災害やマルチハザードが発生した場合の活用も意識しながら研究を進めていただきたい。
- ・今後登場してくる様々な衛星やドローン技術なども踏まえつつ、本研究の成果がどのような場面で活用できるかを意識しながら研究を進めていただきたい。

・本研究の進展により、河川氾濫や火山噴火で生じる時々刻々の変化をとらえられるようになることから、地形学、火山学、災害研究など学術分野への高度な貢献が期待できる。

本委員会でのご意見及び事前評価結果を踏まえ、本研究に関する取組を適切に進めてまいります。本委員会の詳細は以下のURLをご覧ください。

https://www.gsi.go.jp/kikakuhousei/R7_1_kenkyuhyouka.html



委員会の様子

(企画部)

第248回地震予知連絡会の開催概要

令和7年8月19日に関東地方測量部において第248回地震予知連絡会がオンライン会議併用形式にて開催され、全国の地震活動、地殻変動等のモニタリングについての報告のほか、重点検討課題に関する報告・議論が行われました。

地震予知連絡会では、地震予知研究にとって特に検討すべき課題を「重点検討課題」として選定し、報告とそれを基にした議論を行っています。今回は「地震予知・予測に関する概念の変化」を課題として、以下の①～④の報告がありました。

① 地震予知・地震予測・地象予測 –我々は地震予知から地震予測に本当に頭が切り替わったのか？–

「地震現象とは岩と岩が断層面を境に時空間的に多様性をもってずれる現象である」という現在の地震観に基づけば、断層がいつどこでずれ始めるか、どのようにずれ終わるかは、その時々で異なることとなります。このことは1960年代に成立した点震源的な地震観に依る、「いつ」、「どこで」、「どのくらい」の地震が起きるかを予め知るという地震予知の概念はもはや時代遅れであることを意味します。天気予報という科学技術が天気図の変化からレーダー観測までシームレスに社会に受容されていることから見ると、科学技術をうまく使えば現状においても、地下でいつもと違う現象が起きた結果、観測可能な地震活動や地殻変動が発生していれば、これを時間軸上で時々刻々力学的に監視し、「地震の発生をピタリと当てるのではなく」、次に起きそうなことを予測して、一旦地震波や津波等が生じた時には災害を予測する情報として知らせる、までの過程をよりシームレスに取り扱う概念を持ち得ます。このことが地震予知という概念から地震予測、あるいは地象予測と呼ばれる概念への転換の本質と考えられます。

② 天気予報の発展

天気予報は大気物理学の理論的支柱により発展、その理論に基づく数値計算技術「数値予報」により進化してきました。計算機及び計算技術、観測技術などの発展により予測計算技術や初期値解析技術が進化し、今日の天気予報を支える技術となっています。目先の降水に関する降水ナウキャストや降水短時間予報、2～3日先までの短期予報、1週間先までの週間予報、季節予報についてはそれぞれ別々な情報であり、出される情報の種類も異なるものの、気象の情報は目先から長期までシームレスな予測情報として発表・活用されています。

③ 地殻活動の時空間変化の可視化と予測 –長期予測と短期予測–

地震の発生の原因となる現象であるプレート境界での固着・滑りの状況が、過去から現在にかけてどうなっているか、ある程度わかるようになってきています。そこで、議論のための話題提供として、長期予測と短期予測として何を示しうるか例示しました。長期予測としては、断層固着・応力蓄積の分布や将来起こりうる地震シナリオを示すことができます。また、短期予測としては、いま何が起きているかを地震活動と地殻変動の時空間分布などで示すことができます。能登半島での群発地震では、短期予測としての地震活動や地殻変動は示されていましたが、その場所でのどのような大地震が起る可能性があるのかという長期予測と結び付けた議論が十分ではありませんでした。今後は長期と短期を結び付けた議論を行うことで事前の備えにつなげることができると考えます。

④ 地震を駆動する変形過程の包括的理解

スロー地震は、地震モーメントと継続時間の関係や活動の移動速度から、拡散過程が示唆され、自然界においては普遍的に存在する現象と考えられる一方、通常の「速い地震」は高速な破壊移動を示し、地震モーメントと継続時間のダイアグラムでは局所的な分布をしていることから、自然界においては特殊な存在である可能性があります。地震を駆動する変形過程の包括的理解として、地下の広域変形が震源域周辺へと徐々に集中(局在)化し、大地震の発生直前に前震活動やスロースリップが同時に発生することで、断層面近傍に変形の集中(局在)化が進み、大地震の発生が促進されるモデルが提案されています。今後は、これらの活動の移動を迅速かつ高精度に把握することや、プレート境界における超低速変形を検出することが重要と考えられます。

○次回の会議開催予定

第249回地震予知連絡会は、令和7年11月27日(木)に開催予定です。また、次回の重点検討課題は「能登半島地震から2年～理解の現状と残された課題～」です。

○会議資料の公開

本会議の資料は、地震予知連絡会ホームページから公開されています。

https://cais.gsi.go.jp/YOCHIREN/activit_y.html

(地理地殻活動研究センター)

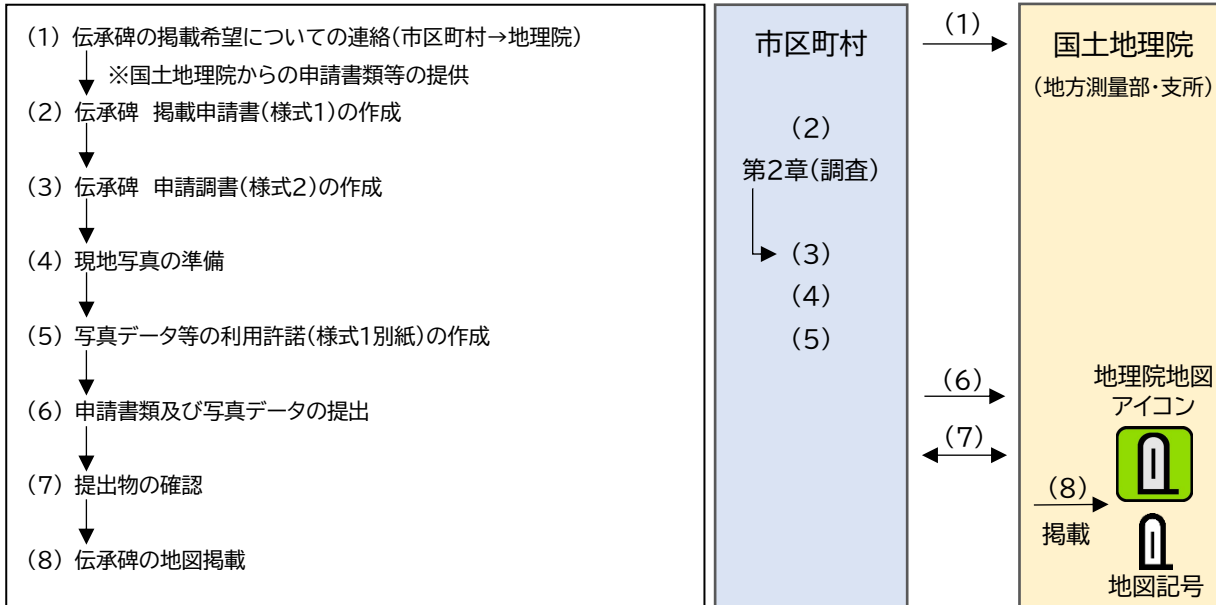
○「自然災害伝承碑」ウェブ地図「地理院地図」での公開数

令和7年9月25日現在

47	都道府県	666	市区町村	2384	基
----	------	-----	------	------	---

詳細については、自然災害伝承碑のページ(<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi>)をご覧ください。
 [市区町村の担当者の皆様へ]自然災害伝承碑に関する当院への情報提供にご協力をお願いいたします。

自然災害伝承碑の申請の流れ



様式や手続きの詳細は「自然災害伝承碑に係る調査業務 実施の手引き 第6版(令和6年3月)」(https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi_info.html)をご覧ください。

○8月の報道発表

発表日	件名	担当部署
8日	国土地理院入札監視委員会議事概要について	総務部
8日	令和7年7月の地殻変動	測地部 測地観測センター 地理地殻活動研究センター
26日	令和8年度 国土地理院関係予算概算要求について	企画部

報道の内容は、国土地理院ホームページ>2025年 報道発表資料一覧(<https://www.gsi.go.jp/WNEW/PRESS-RELEASE/press-2025.html>)をご覧ください。

○10月の主な行事予定

月日	行事
10/21~ 12/21	地図と測量の科学館 企画展「国土地理院と防災」

国土地理院広報は、
国土地理院ホームページ>広報誌>国土地理院広報
(<https://www.gsi.go.jp/WNEW/koohou/>)に掲載しています。

発行 国土交通省国土地理院
 Geospatial Information Authority of Japan
 〒305-0811 茨城県つくば市北郷1番
 TEL 029-864-6255
 FAX 029-864-6441

連絡先: 総務部広報広聴室
 国土地理院ホームページ
<https://www.gsi.go.jp/>

